

「木場の窓から見えるもの(元外交官の視点)」

当社顧問石井正文氏(前駐インドネシア日本国大使)による
気になる海外情報を原則第2、第4木曜日に配信しています。

2021年10月28日配信

第13回:アフガニスタンの「もう一つの影響」; インド・ロシア関係の動向

【ポイント】

- インドのモディ首相は、9月初にはBRICS首脳会合をホストし、9月末にはワシントンでのクオッド首脳会合に出席。
- 戦後、一貫して緊密だったインドとロシアの関係は、21世紀に入り中国の台頭で変容。今や、インドは対中ヘッジで米国・西側に接近する一方、ロシアは対米ヘッジ他で中国に接近。
- アフガニスタンからの米国撤退は、ロシアの(インドの宿敵である)パキスタンへの接近等を通じて、印口間に更なる相違を生み出した。
- 但し、印口双方には、両国関係を一定のレベルに保つインセンティブあり。
- 印口がある程度良好な関係を維持することは、対中関係等を考えれば日本にとってもプラス。

【本文】

- 9月は、2030年以降の世界の行方を決める3つの大国(G3; 米・中・印)の一角であるインドの対外戦略を見る上で、興味深い月。モディ首相は、月初にはBRICS首脳会合(中・ロ・印・ブラジル・南ア)をホストし、月末には訪米しワシントンでのクオッド首脳会合(日米印豪)に出席。
- その内、インドとロシアの関係は、戦後~20世紀中は一貫して緊密。
インドは、パキスタンに軍事支援をする米国へのヘッジでソ連・ロシアに接近。ソ連は対米・対中ヘッジでインドを支援。インドの非同盟路線はソ連と軌を一に。
- 一方、21世紀に入り、中国の急速な台頭で、この構図は変化。
 - ・ 対パキスタン関係やインドの核問題に対する米国の政策の軟化もあり、インドは、対中ヘッジで米国・西側に接近。クオッド参加は最近の典型例。
 - ・ 一方、ロシアは対米ヘッジ+中国(巨大な隣国)との関係管理のために中国に接近。
 - ・ この印口間の立場の違いは、最早構造的なもの。

- アフガニスタン情勢は、印中間の新たな相違の種。アフガニスタン情勢の自国南部への影響を軽減するために、ロシアはタリバンと近い(インドの宿敵である)パキスタンに接近。インドは、米軍駐留下でアフガニスタンへの影響力を伸ばしたが、それは後退。アフガニスタンが対インド・テロ活動の巣窟になる可能性を危惧し、対タリバン強硬姿勢。

- しかし、インド・ロシアそれぞれには、両国関係を一定のレベルに保つインセンティブ有り。
 - ・インドは、対中ヘッジとの関係でロシアにも一定の価値を見出す。BRICSにも残留。
 - ・ロシアは、対中関係最優先は不動だが、中国台頭と米中比肩で、常に中国の後塵を拝することへの不満+中国がロシアを必要とする度合いが益々減少するとの現実認識を背景に、将来の3超大国(G3; 米・中・印)の一角にあるインドとの関係維持に一定の利益。
 - ・最近減少しつつあるとはいえ、未だに印中間の武器取引は両国にとって最大なことはその証左(過去5年間(2015年~19年)、インドの武器輸入の56%はロシアから。ロシアの武器輸出の25%は対インド(2位は中国向け16%))。
 - ・なお、米軍撤退後、印中首脳はアフガニスタン情勢の印中ホットライン開設に合意。

- インドとロシアがある程度良好な関係を維持することは、日本にとってもプラス。
 - ・ロシアが中国以外の大国に少しでも接近することは、対中ヘッジとの関係でプラス。
 - ・日中関係正常化は、75年以上平和条約不在という不自然な状況に終止符を打つだけでなく、日中関係の行方に関する中国側の計算をより複雑にするという、対中ヘッジ上の意味もある(中国は、今までノーケアで済んだ日中関係の「理論的」接近の可能性(=現実には無い)を念頭に置く必要が出てくる。))。
 - ・印中関係がある程度良好であれば、日中関係正常化に対して超大国インドの支援を得ることが出来る可能性がある(米国が本音では日中接近を望まない一方で、インドは日中接近に反対が無いどころか利益を感じる可能性もある。))。
 - ・その意味で、最近、某日本シンクタンクが始めた「日中印」の対話の枠組みは、大いに先見の明があるもの。将来の進展に要注目。

(以上)

りそな総合研究所 顧問 石井正文

問い合わせ先:りそな総合研究所 アジア室 石橋

メールアドレス: shuzo.a.ishibashi@rri.co.jp